

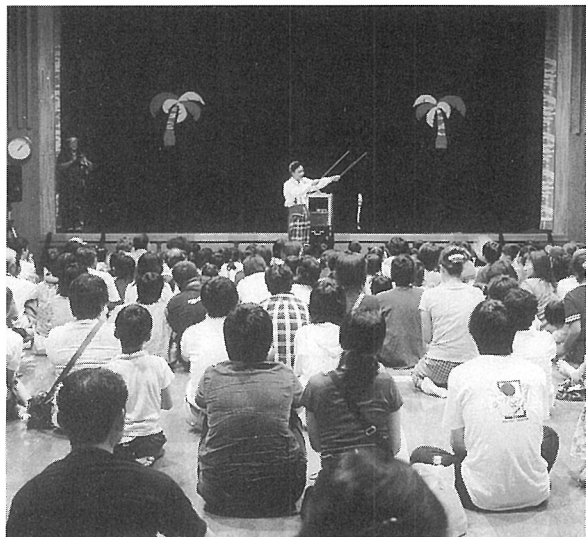
特集 大人が楽しむ人形芝居

人形劇フェスタ2003



発行所
飯田市竜丘公民館
編集人
竜丘公民館広報委員会
印刷所
龍共印刷株式会社
飯田市上郷黒田 ☎22-5353

人口 6,850人
男子 3,368人
女子 3,482人
世帯数 2,156戸
(15年8月末現在)



大道芸// 世界で一番小さな人形劇場

今年も飯田の夏のイベント「いい大人人形劇フェスタ2003」が八月七日から十日まで開催されました。人形劇を通して大人も子どもも感動の共有が持てました。

今年、大人が楽しむ人形芝居「忘れかけていた人形芝居の感動を大人の手に取り戻そう」を特集として行われました。昨年は「家族再発見」をテーマに行っていました。今年のは「大人が豊かな人形劇表現から感動を得ること、子どもたちと面白さを通し、楽しさ、喜びを共有できる。大人が見ても面白い作品は子どもが見ても面白いをコンセプトに「子どもたちと感動を共有しようではありませんか。」と四日間開催されました。

竜丘地区では、八日午後七時から又ふれあいセンター、九日午前十時から駄科公民館、午後一時から長野原区民センター、二時三十分から竜丘公民館、十日午前十一時から上川路公民館、午後一時から竜丘公民館で、九劇団が熱い上演を見せてくれました。

大人も子どもも知っている「大きななご」や「ちびくろサボ」などを含め、面白い人形劇がありました。上川路公民館で行われた、西川禎一おひとり座の上演では始めにギターを使っての歌から入り「昔ばなしや絵本を子どもに話しているかな?」と、昔ばなしの良さを語りとして交えながら人形を使って劇をしました。

舞台の前へ出て話をするなどして会場全体がどんと引き込まれて行き、まるで昔ばなしを聞いている雰囲気になりました。最後には、こまわしを見せてくれるなど、昔なつかしい感動を覚えました。

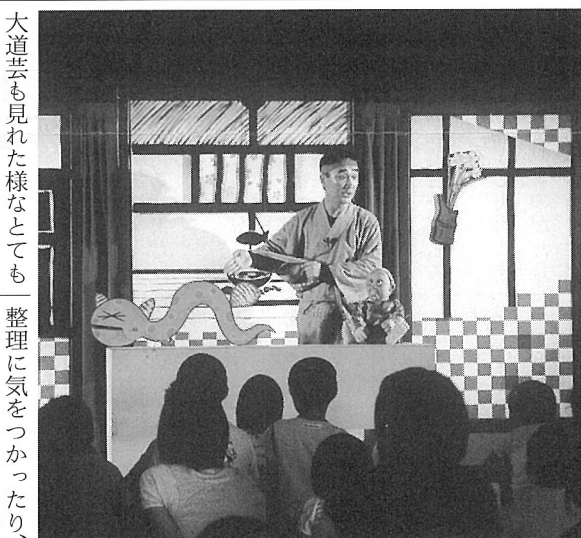
竜丘公民館で行われた、あがりえ弘虫さんの上演では「世界で一番小さな人形劇場」と題し、胸にすっぽりかかえ込める箱の中で、赤ずきんちゃんの人形劇がありました。始め小さな舞台での人形劇でしたが、だんだん大げさな人形使いになり、ついには箱を飛び出しました。オオカミが撃たれるシーンには、観客の中から一人のお父さんが手伝い猟師の帽子をかぶり、猟銃を持って演じるなど、ホールの中が笑いで一杯になりました。人形劇を見に行き、



筑波大学人形劇団 NEU (のい) の皆さん

七月六日の日曜日、水辺の楽校で竜丘小学校三年一組は親子レクをしました。虹マスを二百匹近く放流し、最初に釣りをしました。ス役員で、草刈り、竹串作り、魚釣りなどの準備をしました。

当日の朝も、雨がまだ降っていて、開始時間ギリギリ迄、空とにらめっこをしていました。今年は天候が不順なために、雨天の場合の室内レクも検討していましたが、「入ってよし!」の声とともに、一斉に川の中に入り、泥だらけになって魚を追っていました。つかまえた魚は、その場で炭火で焼いて食べました。



劇団ちろりん「おばあさんとたぬき」の一場面

大道芸も見れた様なども楽しい舞台でした。他にも人形劇を通して、考えさせられたり、やさしい気持ちになれたりしました。アンケートの中にも、「始まる前のざわついた会場も、上演に入ると、子どもも大人も引き込まれてとても楽しかった。」とあり、どの会場でも大盛況だったことが分かりました。

今年観劇者数は、五会場全体で八百九十七名でした。九日の公演は雨の為、観劇人数が少し減ってしまいましたが、地区のスタッフの方々は雨の中駐車場の

親子レクを終えて

PTA学級代表 長江博樹

「僕はこれ食べる」と何本目だよ」

「あんまり食べたことなかったけどおいしかったよ」と言う声も聞こえて来て、子どもたちも大変喜んでくれました。

男の子も、女の子も、服の汚れは気にもせず、夢中な思い出となり、さわやで魚を追っていた。あんな風が吹く中で、楽しいキラとした瞳は、見守っひとときが過ぎました。



六月二十九日(日)に竜丘財産区(白井林)の現地観察会が行われました。現在竜丘財産区では、白井林を里山的に活用し管理していくという構想があり、その第一段階として関係団体、環境を考える市民グループを集めて行われました。

林業を取りまく状況は、全国的にも大きな課題であり、飯田市においても森林の持っている多面的な機能を、総合的に、事前の打ち合わせなど当日まで大変ご苦労様でした。一九七九年から始まった人形劇カーニバルも「人形劇フェスタ」に変わり五年度。今年も予定していたアジア人形劇フェスティバルも諸般の情勢上中止となってしまいましたが、大人が楽しむ人形芝居の特集は、私たちにとても大きな感動を与えてくれました。また来年もこのフェスタを私たちの手で盛り上げ、家族で感動を共有したいものです。



今年、けんか自体がエスカレートしておおごとなる場合がある。子どもの時期の経験不足が原因かもしれない。けんかも一つの自己主張ととらえ、見守る姿勢で各家庭から親子で共に泣き笑いでいる関係であり続けたいものです。

里山を見直そう 財産区、現地観察会

観察会では、初めて財産区有林に入るといふ人もおられましたが、現状を知る良い機会となり、樹種も豊富で山菜など山の幸も期待できる林であることが確認できました。そして今後、市民有志による団体を作りそれを核に地区を挙げて里山を管理しながら、環境教育、体験学習等に活かしていくためには、まず今の状態に手を入れ、整備する必要があると求められました。

事件のこの教訓を生かし二度と繰り返さない強い意志を持ち続けたいものです。今、「スローライフ」といった風潮も、こんな時代には重要なキーワードです。「昔は良かった」最近では聞かれませんが、こんな時代になるとつくづく感じるゆとりが無さ。昔はもっとゆとりがあって、人付き合いはぎくしゃくしてなかったと思う。けんかをしてけんかをする程に仲が良いと言われたものだ。

ヤブ吹

♪なんでもだろう? というフレーズは今年大流行しています。よく聞いてみると、笑えることばかりではありません。

今年、世界規模の異常気象で、フランスでは猛暑により死者が、数百人出た。日本も長梅雨と冷夏の影響で景気動向や、農作物にもかなりの被害が懸念されています。

ところで最近では本当に「なんで」と思う様な悲惨な出来事が、年々増加している。事件では長崎の幼児誘拐殺人など、我々の背景にある色々な問題を浮き彫りにさせた。家庭事情や、学校教育、また、地域の関わりはどうだったのだろうか。もっと地域ぐるみで一つの事件の前兆と思われる現象を、真剣に受け止める現象を、自分たち地域の子どもたちの行動や出来事に関心を持って接していくべきではないでしょうか。

合併協議へ向けて 市政懇談会開催される

七月十一日、竜丘公民館において、飯田市政懇談会が開催されました。今回の懇談会は、香木村・上村・南信濃村から市町村合併の協議の申し入れを受けて、飯田市の基本的な考え方を説明する場として、設けられました。

まず冒頭、市長よりあいさつ・合併の基本方針について説明がありました。市町村合併については、地域の歴史、文化、社会経済活動のつながりを考えると、飯田、下伊那は一郡一市が望ましいこと。合併協議にあたっては、市が目指す環境文化都市を都市像にする。具体的には、



○合併方式は編入合併とする。田市とする。○合併後の行政サービスと負担の水準は、飯田市を基本とする。

市当局の担当者からは、三村と飯田市の面積、人口、世帯数などの村勢や自治体財政状況などの比較。また、合併した場合を想定してのメリット、デメリットなどの報告がありました。まとめとしては、今回の三村が三遠南信自動車道沿線に位置していることから、三遠南信の交流の拠点地域になっていき発展が期待されるとの報告でした。

参加者からの、質疑、意見交換では、一郡一市を目指すのであれば、他町村へも積極的に働きかけるべきではないか。また、行政サービスなどは、三村の方が進んでいる事例もある。合併すれば、地域人口に対し行政職員の比率が減るが、そ

願いはロケットのついで

おひさま文庫七夕まつり

去る七月十二日におひさま文庫主催での、「七夕まつり」が、竜丘公民館の図書室で行なわれました。

最初は、みんなで思い思いに短冊への願いごとを書き笹に結びました。「勉強ができるように」とか、「先生になりたい」とか色々書いてありました。中には「お金持ちになりたい」というのも...

その後、七夕にちなんだ紙芝居があり、今日みんなが楽しみにしていた工作がありました。作ったのは、その名も「ビニールロケット」。名前の通り、ビニール製のロケットなのですが、ビニールの正体は、よく見かけの傘を入れる袋でした。その袋に息を吹き入れ、口をギュッと、きつく絞めてセロテープで止めます。次にうまく飛ばすために色画用紙で、おもりと尾翼をつくりそれをビニールに貼りつけて完成です。赤や



ロケットづくりに夢中です

ピンク、青や緑と色とりどりのロケットが出来ました。自分の名前をおもりの所に書いて、大ホールで飛行開始！。みんなで自分の作ったロケットを、どのくらい飛ばすのか試してみたり、投げあつたりして楽しみました。感想を聞いてみると「うまく作れた」とか「楽しい」と



感動だった夏の一夜 親子映画鑑賞会

もし、口をきけない先生が赴任してきたら、あなたならどう思いますか。七月十二日、竜丘公民館ホールにて、小学校PTAと公民館の共催による親子映画鑑賞会が開催されました。当日はホールいっぱい多くの親子の皆さんが来場し、映画鑑賞を楽しみました。

今回、上映した映画は機関車先生です。ものがたりは、戦争の傷跡を引きずっている昭和三十年代の瀬戸内海に浮かぶ小島が舞台です。この島の小学校に、臨時教師としてきた先生は子どもたちの病気がきっかけで、口をきくことができなくなりました。そのために、島のおとなたちは戸惑い、偏見も生まれます。しかし、こどもたちは彼の不思議な魅力とその体格から、蒸気機関



水音と踊りに 公民館委員研修旅行

する財政上の特例措置が平成十七年度三月までであることや、行財政改革での地方交付税の削減などが議論に拍車をかけています。長野県内をみても合併を目指す自治体もあれば、自立を目指す自治体もありま

す。合併の是非はどのような形で、この協議を契機に真の地方自治を確立していけるか、市当局や住民私たちに投げかけられていると考えます。

去る七月二十一日の海の日は、今年も体育委員会が幹事となり、三十一名の皆さんが参加して公民館委員研修旅行が行われました。今回は水の音と踊りに心をふるさとを見るをテーマに、岐阜県美濃地方を訪れました。

午前六時三十分、竜丘公民館を出発。バスは、中央道・東海北陸道を走り、まず、「うだつ」の上がる町並みで有名な美濃市に向かいました。中央道では豪雨にあり、先を心配しましたが、皆さんの行いがよいことがあり、美濃市に到着する時には雨は上がりました。

今も残す町並みを散策し、代表的な和紙問屋であった吉田川に飛び込

ることを大切にしたい。」などの感想が出されています。殺伐としたニュースが流れる今日このごろですが、人が生きるなかで大事なものは何か、親子で考える一夜になったのではないのでしょうか。

まられるたまり場として、十一月から活動を始めた「みんなの家 ぬくぬく」が月に一回行われています。この活動では、竜丘のお年寄りや子どもが気軽に参加でき、集まった皆さんが、楽しい一日を過ごし笑い声が絶えません。

今後は、名前のようにますますふれあいの場となることでしょう。

また、昨年の市政懇談会を契機に地域の皆さんが気軽に集

む子供たちの姿は見られませんでした。住民の生活水として利用されてきた名水百選「宗祇水」など、せせらぎを聞きながらのんびり巡りました。

うだつの上がる町並み